

開拓者たちを励ました

お声がかりの柏かしわ

屯田兵が、原野を切り開き村を整えていた時代の山鼻。ここで明治天皇が目を留められた一本の木を紹介します。

明治十四年（一八八一年）、天皇は、東北・北海道を視察し、九月一日に山鼻村にもおいでになりました。

この日、天皇は、真駒内牧場を視察した後、藻岩下・真駒内間の仮の橋を渡り、石山道路を山鼻に向かって進んでこられました。道の両側には、鋳くわを振って働く屯田兵たちがいました。

天皇が山鼻小学校で休まれた時、屯田兵の人たちは、自分たちが苦心して作った農作物や麻、網、繭まわし、真綿、果物などをお見せしました。どれも立派な出来だったので、天皇はこれをお褒めほめになつたそうです。

この辺りは、学校と屯田兵の中隊本部を中心に、練兵場が東西の屯田にわたつて大きく広がっています。

した。そして、その一角には、大きな柏の木がそびえ立っていました。

天皇は、この木に目を留められ、木の名前を問われたので、そばにいた人が柏の木であることをお答えしたということです。

このことを伝え聞いた山鼻の人たちは、この木を「お声がかりの柏」と呼び、大切にしてきました。しかし、推定樹齢二百三十年、幹の太さ六十センチ、高さ十八メートルの老木も根から幼木を残して枯れたため、昭和五十一年十月十五日に切り倒されました。二世の幼木は、山鼻公園と山鼻小学校に移植され、今も開拓の歴史を伝えています。



明治天皇御声掛りの榊の木
（山鼻小学校所蔵）

（平成十年十二月号・第五十二回）